

第74回FIAFプラハ会議報告 A Report on the 74th FIAF Congress in Prague

「共有」をテーマにしたFIAF会議と、 NFA見学の6日間

江口 浩
Hiroshi Eguchi

国際フィルムアーカイブ連盟(FIAF)の第74回会議は、2018年4月22日から27日までチェコ共和国のプラハにおいて開催された。今回はFIAF創立80周年の記念大会でもある。ホストを務めたのはチェコ国立フィルムアーカイブ(NFA)。NFAのCEOであるミハル・ブレガン氏とマテイ・ストゥルナド氏が全体の議事進行を取り仕切った。

初日22日はプラハ国立美術館ヴェレトゥルジュニー宮殿分館にて開会式が行われ、翌23日か

らは会場をプラハ国立博物館新館に移し、4日間の討論が繰り広げられた。

この会議では、毎回テーマを設けたシンポジウムの開催が通例となっている。今回のテーマは「共有すること(SHARING)」で、第1日は「共有の歴史」「場の共有」「知識の共有」「アナログ技術と処方」の共有：アーカイブや映像作家が運営する現像所」という論点を中心に、発表や討論が行われた。筆者が特に興味を持ったのは、現像所

のプライベート化ともいべき事例紹介であり、フィルムでの作品製作にこだわる映像作家たちが、廃業した商業現像所などから、廃品同然の現像タンクやプリンターなどを譲り受け、特別仕様の現像設備を作り上げていった複数の事例が紹介された。フランスの「ラボミナブル」のように事実上商業ラボとして稼働しているものや、チェコの「フィルム・ラボラトリー・ボヘミア」のように、映像作家たちのグループによって運営されているものなど、その形態は様々だが、現像施設を持つアーカイブからの技術指導や、作家たち自身の研究などによって、新たな表現に挑戦し続けている様子などが報告された。なお作家たちに共通する目下の悩みは、生フィルムの供給がどの程度維持されるのか、という点であった。

シンポジウム第2日は「オープン・ソースによる保存のためのツールについて」「メタデータの共有」「共有：FIAF加盟機関相互による貸借と交換」「観客との共有」という論点での討議が持たれた。FIAF会員間の作品貸借で、近年、英国映画協会(BFI)だけが内部事情により著作権料とは別のフィルム使用料を徴収していることについて、当館館長・岡島尚志は多数の会員の意見を集約する形で、FIAFの精神と「共有」の観点から、これを以前の通り基本的には無償に復すべきだとし、同時に相互主義の立場からBFIに対して個別に徴収する必要性も示唆した。

第3日は「映画第2世紀フォーラム」と題し、「アーカイブと災害対策」というテーマについて討議された。昨年10月、米国カリフォルニア州ナパ・バレーで発生した山火事は、フランシス・フォード・ Coppola やジョージ・ルーカスらによって設立された「アメリカン・ゾートロープ社」の社屋直前まで迫ったため、所蔵していたフィルムや小道具などを、元来ワイン貯蔵庫として使用されていたトンネルや、飛行場の格納庫に避難させた事例が紹介された。また当日はFIAFの技術委員会、カタログング・ドキュメンテーション委員会などによる活動報告、地域別ミーティングなども行われた。

討議最終日となる第4日はFIAFの総会である。会長から総会に向けての報告、前年度予算の決算や新年度予算に関する承認、出版物の流通状



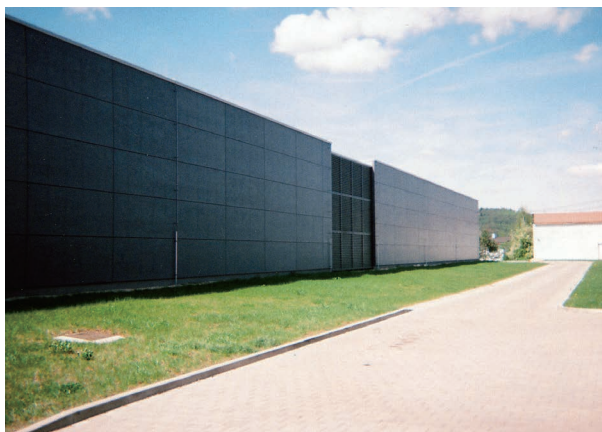
↑メイン会場となったプラハ国立博物館新館



↑シンポジウムの様子



↑ 収蔵庫A棟(左)と事務棟(右)



↑ まだ稼働に至っていない収蔵庫B棟



↑ 収蔵庫B棟の駐車スペースに建てられた碑

況に関する報告、新たな名誉会員の選出、2021年の総会開催地を選ぶ投票などが行われた。投票の結果2021年の総会は、バングラデシュのダッカでの開催が決まった。その後ギャラリー、ラ・ファブリカに座を移しての閉会式となった。

翌27日午前中はNFAの収蔵施設を見学した。収蔵庫はプラハ中心部から南へ車で1時間ほどの距離を隔てた、フラディシュトコという町にある。ヴルタヴァ(モルダウ)川に沿って山間部への道を進み、別荘地のような村落を抜け、黄色い花の咲く草原の狭い一本道を登ってゆくと、南東から北西方向に細長く伸びた2棟の建物が見えてくる。ようやく収蔵庫に到着である。二つの建物はA棟、B棟とそれぞれ呼ばれており、平屋建てのA棟はB棟の東側に建っている。正式には町の名前をとって、A棟はフラディシュトコI、B棟はフラディシュトコIIという名称なのだそうである。

A棟を案内していただいたのはヴラディミール・オペラ氏である。FIAFの名誉会員で副会長を務められたこともあるオペラ氏は、教職を経て1965年にNFAに入り、主に技術的な側面からチェコ(スロヴァキア)の映画保存に携わって来られた。またユネスコ勧告に基づく「世界視聴覚遺産の日」制定に尽力されるなど、映画保存の世界における重鎮である。

オペラ氏の説明によれば、この場所はナチスの強制収容所跡地で、A棟の建物は、もともと親衛隊(SS)がガレージとして使っていたものであるという。収蔵庫として改装するために、オペラ氏は自らレンガを手積みして窓枠を埋める作業に従事したそうだ。

A棟の入り口にあたる2階建ての事務棟の一室では、ロビー・カードの整理が行われていた。連絡通路を抜けA棟に入ってゆくと、最初の部屋にはポスターなど紙資料が収められており、その奥がフィルムの保存庫である。壁に沿って長く伸びる狭い一直線の通路に対して、櫛の歯状に配置されたスティール棚には数多くのフィルムが置かれている。オルヴォやアグファといったフィルム製造会社の金属缶が多く見られる一方で、プラスチック製で赤や黄色の色鮮やかなケースが目を引く。これは、上映用プリントは緑というように、収められているフィルムのジェネレーションなどが容易に判別できるよう導入された工夫で、オペラ氏の発案によるものだという。A棟は建て替えの計画が練られているようだ。

B棟はミハル・ブレガン氏に案内していただいた。2016年に竣工した地上3階地下1階建のこの建物は、まだ稼働に至っていない。建物のうち日当たりのよい南西側3分の1は、事務・作業用のスペースに充てられており、近々スカナーなどを導入して、アーカイブ内でデジタル化作業を行う計画が進められている。一方、建物の北東側3分の2は収蔵スペースで、各階に独立した空調設備を備え、室温-5℃、相対湿度35%の環境で運用が可能であるという。

B棟正面玄関向かいの駐車スペースに、小さな碑が立っている。そこには「1975年に計画され、2015年に着工した、この建物を記念して。」と書かれており、この新棟建設が、彼らの悲願であったことがよくわかる。

なお可燃性フィルムは、フラディシュトコから

4kmほど離れた、別の収蔵庫で保存されている。

同日の午後は、プラハ旧市街にあるカレル・ゼマン美術館を見学した。カレル・ゼマン(1910-1989)は、チェコスロヴァキアを代表するアニメーション作家で特撮監督でもある。こじんまりとした美術館の中では、ゼマンの作品歴が紹介されるとともに、作品ごとにディスプレイが設置され、特撮場面の撮影テクニックがわかるように、実際の画面と種明かしとを見比べられるような仕掛けになっている。また撮影で使用された衣装や小道具なども数多く展示されている。

また会議の後はNFAの上映施設であるボンレポ劇場で映画を鑑賞した。24日は自前の現像設備を駆使した映像作家たちの作品集が上映された。中でもオランダのエステル・ウルルスによる16mmの2作品『深紅』(Deep Red、2012年)と『コンラートとクルフルスト』(Konrad & Kurfürst、2013年)は出色であった。特に後者は写真乳剤の生成から、染色、調色現像に至るまで、すべて自身の施設内で製作しており、もはや単なる自家現像のレベルを明らかに凌駕している。25日はチェコが世界に誇るアニメーション作家ヤン・シュヴァンクマイエル監督の最新作『昆虫』(Hmyz、2018年)が上映された。また27日は極めて上映機会が少ないとされる、ユライ・ヘルツ監督の1968年作品『火葬人』(Spalovač mrtvolí)が上映され、その主題と特異な表現に圧倒させられた。

なお、第75回のFIAF会議は、2019年4月7日から13日まで、スイス・ローザンヌで開催される。【1】

(国立映画アーカイブ特定研究員)